

的に対象世界を人間の価値観(目的論的価値判断)に沿って人為的に再構成することを本質的目的とする近代西欧科学を誕生させたのである。

前もって言うておくと、本論文が対象とする近代科学の一分野である現代中国学においても、当然の成り行きとしてその研究対象となる世界(すなわち中国あるいは日中関係を含む中国の対外関係)を自己の目的論的価値判断あるいはイデオロギーにそって再構成することを意図する傾向を帯びるものになる。

「人間のために」なされる近代西欧科学の研究にあっては、研究対象の「世界」と研究主体である「神から自立した人間」がより完全に区別され切り離されるから、「人間」のために「世界」を奉仕させるという目的をもって研究が行なわれる。つまり研究対象の「世界」は、研究主体としての「人間」と対等平等の関係にあるのではなく、「人間」に従属するものとして位置付けられる。

この結果、その研究の「客観性」は、研究対象と研究主体の間の「対話」によっては検証され得ないものとなる。なぜなら「対話」はその言葉の厳密な意味においては、「世界」の上に「人間」を君臨させずに「人間」を「世界」と対等平等の位置に置かなければ原理的に成立し得ないからだ。

こうして「世界」との「対話」性を欠いた科学研究のいわゆる「客観性」は、方法上、研究主体の「人間」の価値観に沿って「世界」の再構成を試みる実験(実証)の成否いかんのみによって検証されることになった。繰り返しになるが、その場合実験(実証)は、その再構成が「世界」に対して優位に立つ「人間」の側からの一方通行的な意図の下になされるという意味で、「対話」の方法と原理的に異なるのである。

今日、近代西欧科学の一翼を担おうとする現代中国学の主流が、ウォッチング＝観察学に偏したものとなっているのも実はその根底に、研究主体の「人間」を研究対象(客体)の「世界」に対し

分離しかつ優位に置く近代科学の弊害が働いて、その方法的検証に、「世界」との「対話」の必要性を認めない傾向があるためにほかならない。

### (7) チャイナ・ウォッチングの本質

チャイナ・ウォッチング(中国観察学)も本来、近代科学の特質を共有している以上、研究対象を研究者(研究主体)の目的論的価値判断にしたがって再構成しようとする意図を明確に持つ。それゆえに中国観察学は実際には、研究対象に研究主体が一切手を触れないことを前提とするという意味での厳密な観察学(ウォッチング)とは、その本質を異にするものと言わねばならない<sup>16</sup>。

にもかかわらず現代中国学がチャイナ・ウォッチングと呼ばれる場合は、自身の学が他の近代科学と同様その根底に目的論的価値判断が働いている点を自覚しないか軽視し、研究者が研究対象を再構成しようとする意図を持つことに対し方法的に無自覚なことを示しているのである。この点でチャイナ・ウォッチングは他の近代科学以上に多くの問題を孕むのである。比較の問題として念のために述べておけば、戦前戦中の現代中国研究の場合には、方法的にウォッチング＝観察学の立場を採らず、国策に沿った研究を目指すという点で目的論的な価値判断を含み、しかもその点に明確な自覚を持つ場合が少なくなかった。この点は後段で述べる。

繰り返し言えば、「自然中心主義」「神中心主義」「人間中心主義」の3種の世界観が、それぞれの価値観に基づく目的論的価値判断を不回避的に持つこと自体は何らその「認識の客観性」を損なうものではない。同様の論理から、私はチャイナ・ウォッチングが方法的に「認識の客観性」を欠くと主張するものでないことは当然である。

問題は目的論的価値判断の有無にあるのではない。近代科学が研究主体の「人間」を研究対象の「世界」に優越する位置に置くために、「世界」の再構成を「対話」不在の歪んだものにする点にこ

そ重大な欠陥が<sup>はら</sup>孕まれているのである。

近代西欧科学の方法論上のこうした欠陥はやがて1950年代半ばから60年代にかけて、多くの現実的弊害を生んで、重大な反省を迫られることになっていく。

しかしここではその弊害がいかなるものかに議論を移す前に、ひとまず人間中心主義的な近代科学と、「認識の客観性」はどのように方法的にかかわるのか、を祖述しておくことにしたい。

## [II]

### 近代科学と「認識の客観性」

#### (1) 人文・社会科学における目的論と因果論

社会科学、人文科学分野では17世紀のフランシス・ベーコンのイドラ論（「ノウム・オルガヌム」）以来、20世紀初頭のマックス・ヴェーバーの価値自由論、カール・マンハイムの知識社会学まで、常に目的論に伴う価値判断と「認識の客観性」の関連が、方法論として自覚的に問題にされてきた。むろん日本の学界でも今日まで多くの方法論が論じられてきている<sup>17</sup>。にもかかわらずいずれの場合にもクーンやストロースらの自然科学や文化人類学の試みに匹敵するほどの学問的な努力が十分になされたとは到底言い難い。

第一の争点は、人文・社会科学研究から果たして目的論的な価値判断を完全に排除し得るかという点にある。たとえば、価値自由論（*Weltfreiheit*）を唱えたマックス・ヴェーバーは、人間の倫理（すなわち目的論的価値判断）が必ずしも「認識の客観性」を犯すものとは限らないことを明らかにした。しかしそのヴェーバーにして「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」と並ぶその宗教社会学の代表作「儒教と道教」において、東洋的儒教倫理を西洋的ピューリタニズムの倫理と比較し、儒教には近代の幕開けに必須の「宗教改革」がもたらし得たような合理的精神が欠如している

と一方的に断定を下した。その理由として儒教には実践倫理的で世俗的な目的意識が強く働く（すなわち、目的論的価値判断と目的追求的意志が働く）ため、「世界」を認識しようとする意欲にむしろ欠如し、西欧近代に特徴的な「認識の客観性」を確保し得る科学的精神を生み出す力を持ち得なかった点を上げたのである<sup>18</sup>。

しかし儒教倫理がいかに世俗的な実践的目的意識を濃厚に持つとしても、それが一定の世界認識への意欲を伴うものとなり得ること、その場合実践的目的意識（すなわち目的論的価値判断）が「認識の客観性」を必ずしも損なうものでないことはヴェーバー自身も認める自明の理である。この点は1920年代以後の中国の一思潮を形成した新儒家の一人、馮友蘭が朱子程子の世界認識を伴う宋明理学の儒家思想の中に、バートランド・ラッセルの論理実証主義と同様の仕方で「認識の客観性」を確保しうる科学的方法論の可能性が含まれることを論証した事例に見て取れる。馮友蘭の試みは、ヴェーバーの上述のような断定に対する明瞭な反証と見ることができたのである<sup>19</sup>。

このことはヴェーバーにして儒教倫理に基づく世界認識が、ピューリタニズムに基づく世界認識よりも「認識の客観性」確保の点で劣っているとの西欧中心的価値判断に偏った歴史観を免れなかったことを示している。ここにはサイドが問題とした「オリエンタリズム」の弊害が明らかに存在しているが、この点の方法論上の詳細については後段で論じる<sup>20</sup>。繰り返しになるがレヴィ＝ストロースやクーンはこの点で、原則的に目的論的価値判断を人間の世界認識から排除することはできないという前提に立って、かつ種々の世界認識には客観性を測る上での優劣の差を決定する一義的基準はないとする議論を行っていた。

第二の争点は、社会科学研究に目的論的な価値判断の混入が避け得ないと前提した場合、その価値判断が研究の「認識の客観性」を損なうと一義的に言えないのは、なぜかという点である。「認